

# 「太平洋漏水孔」漂流記

小栗虫太郎

青空文庫



## 竜宮から来た孤児

前作「天母峯」で活躍した折竹孫七の名を、読者諸君はお忘れではないと思う。

アメリカ自然科学博物館の名鳥獣コレクター採集者として、非番オフでも週金五百ドルはもらう至宝的存在だ。その彼が、稀獣オカビ矮麟を追い、麝マズク・オクゼン

牛をたずね、昼なおくらき大密林の海綿性湿土スポンジ・ソイルをふみ、

あるいは酷寒水銀をくさらす極氷の高原をゆくうちに、知らず知らず踏破した秘境魔境のかずかず。その、わが折竹の大奇談の秘庫へ、いよいよこれから分け入ってゆくことになるのだ。

「おい、海を話せよ、君も、サルガツソウ・シー藻海シぐらいは往つたことがあるだろう」

とまず私は困らせてやれとばかりに、折竹にこう訊いたのである。

というのは、海に魔境ありということとは未だに聴いてないからだ。絶海の孤島、といえばやはり土が要る。たいていは、大陸の中央か大峻険の奥。密林、氷河、マイアスマ毒瘴気の漂う魔の沼沢と——すべてが地上にあつて海洋中にはない。ただ、あるといえれば藻海くらいだろうが、それも過去における魔境に過ぎず……いまはその怪馬尾藻ほんだわらも汽船の推進器スクリュウが切つてしまう。

大西洋を、メキシコ湾流がめぐるちようどまつ唯中、北緯二十

度から三十度辺にかけておそろしい藻の海がある。

これは、紀元前カルタゴの航海者ハノンが発見したのが始め。

帆船のころは、無風と環流のためそこを出られなくなり、舵器には馬尾藻ほんだわらがぬるぬると絡みついてしまう。そういう、なん世紀

前かしれぬボロボロの船、帆柱にもたれる白骨の水夫、それを、死ぬまで見なければならぬ新遭難船の人たち。絶望、発狂、餓死、忍びよる壊血病。むくんだ腐屍の眼球をつつく、海鳥の叫声。じつに、凄惨といおうか生地獄といおうか、聴くだに慄つとするような死の海の光景も、いまは藻サルガツソウ・シー海のとおい過去のことになつている。

では、海に魔境は絶対ないと云えるのか!? そういうと、折竹

は呆れたような顔をして、

「オイオイ、俺だからいいようなものの、他人には云うなよ。今どき、サルガツソウ・シー藻海なんて古物をもち出すと、君の、魔境小説作家たる資格を疑うものがでてくるからね。だが、じつさい海には魔境といえるものが、少ない。彼処に一つ、此処に一つと……マアそれでも、三つくらいあるだろう」

全然ないと思われた海洋中の魔境が、折竹の話によれば三つほどあるという。ゆけぬ魔海——それはいったい何処のことだろう。また、陸の未踏地のごとく全然人をうけつけぬ、その海の魔境たる理由？ しかも、それがわが大領海「太平洋」中にあるという、折竹の言葉には一驚を喫しないわけには往かない。

「それが、東経百六十度南緯二度半、ビスマルク諸島の東端から千キロ足らず。わが委任統治領のグリニツチ島からは、東南へ八百キロくらいのところだ。つまり、わが南洋諸島であるミクロネシアと、以前は食人種の島だったメラネシア諸島のあいだだ。そこに、世界にもう其処だけだという、海の絶対不侵域がある」

「ほう、まだ未踏マーレ・インコグニタの海なんてこの世にあるのかね。で、名は？」

「それが島々でちがうんで色々あるんだがね。ここでは、いちばんよく穿っているニューギニア土人の呼びかたを使う。〔Dabuダブ」

kuクウ〕——。つまり『海の水の漏れる穴』という意味だ」

土人の言葉には、ひじょうに幼稚な表現だが奇想天外なものが

ある。この「ダブツクウ [Dabukku]」などもその一つ。直径百海里にもわたるこの大渦流水域を称して、「海の水の漏れる穴」とはよくぞ呼んだりだ。

そこは、赤道無風帯のなかでいちばん湿熱がひどいという、いわゆる「レジョン・オブ・クラウド・リング熱霧の環」のなかにある。そしてその渦は、外辺は緩く、中心にゆくほど早く、規模でも、「メールストレームの渦」の百倍くらいはあろう。ましてこれは、鳴門やメールストレームのような小渦の集団ではなく、渺茫数百海里の円をえがく、たった一つの渦。

周縁は、海水が土堤のように盛りあがっている。ことに、地球自転の速力のはげしい赤道に面した側は、まさに海面をぬくこと



数メートルの高さ。さながら、大環礁<sup>アトール</sup>の横たわる心地す——とは、はじめに “ [Dabukku] ” <sup>ダブツクウ</sup> をみた <sup>デ・クイロス</sup> De Quiros の言葉だ。

この、オウストラリア大陸を発見し損なつたそそつかしいスペイン人が、 “ [Dabukku] ” <sup>ダブツクウ</sup> を最初みたのが十七世紀のはじめ。

しかし彼は、この化物のように盛りあがつた水の土堤に、舵をかえして蒼惶と逃げ出した。そしてそこを、雲霧たちこめるおそろしい湿熱の様から、 “ <sup>ロス・イスラス・デ・テンペラス</sup> Los Islas de Temperuras ” と名づけた。すなわち、「颶風の発生域の島々」という意味。

「なるほど」

と、もう私は一、二尺のりだすような亢奮。しかし、いまの説明のなかに判じられないようなものがある。

「その、島々というのはどういう意味だね。〃 [Dabukku] 〃  
ダブツクウ  
 のなかには、島があるのか？」

「そうだ、大小合して七、八つはあるらしい。その何百、何十年かはしらぬが隔絶した島のなかを、君は一番覗きこみたいとは思わないかね」

と、なにやら仄めかし気にニツと笑った折竹の眼は、たしかに私を驚死せしめる態の大奇談の前触。そしてまず、〃Dabukku

《ダブツクウ》の島々について語りはじめた。

「ニューギニア土人は、その黒点のようにみえる島を穴と見誤った。海水が、ぐるりから中心にかけて、だんだんに低くなつてゆく。それを、勾配のゆるやかな大漏斗のように考えた。つまり、

その穴から海水が落ちる。そのため、こんな大きな渦巻ができる  
と、いかにも奴等らしい観察が「ダブツクウ [Dabukku]」の語原だよ」

「ふうむ、太平洋漏水孔か……」

「そうだ、案外渦の成因はそんなところかもしれないよ。ところで、  
なぜ『ダブツクウ 太平洋漏水孔』のなかへ踏み入ることができないか。」

一九一二年に、当時の独逸ニューギニア会社の探險隊が、『ダブツクウ 太平洋漏水孔』へ入ろうとした。そのとき、はじめて魔海のおそろしさがハッキリと分つたのだ。それは、『太平洋漏水孔』の海面下が一面の暗礁で、小汽艇のようなものでも忽ち覆えつてしまう。つまり、縦に突つきろうにも渦流にまかせようにも、重さと抵抗をもつ汽艇のようなものは駄目なんだ。ただ、どうかと思われる

のがアウトリガー・カヌー桁付き独木舟だ。

こいつは、目方も軽いし抵抗も少ない。ふわふわ渦にのってゆくうちに、どれかの島へゆけるだろう。と、マアその考えもそこまでは良いんだがね。考えると、それでは行きつきりになってしまふ。渦が逆流でもしないかぎり……永遠の竜宮ゆきだよ」

「……………」

私は、さつきから折竹が頻繁につかう、竜宮という言葉が気になって堪らない。こいつ、何かどえらいものをきつと隠しているなど、問おうとしたのを折竹が遮って、

「それから、もう一つ『太平洋漏水孔』ダブツクウ探険の大障害というのが、さつきも云ったひじょうな高湿度だ。なにしろ『太平洋漏水孔』

の形がちょうど漏斗だからね。海面の蒸発に涿留がおこる。その探険隊が、『海の潮吹き穴』<sup>メーレンス・ブラーゼロホ</sup>とそこを名づけたように、濛気赤道太陽をさえぎる大湿熱海だ。

ところで、そのニューギニア会社の探険のとき、実験がおこなわれた。それは、<sup>コックローチ</sup>大蚪虫をいれた箱を『太平洋漏水孔』へ流したのだが、その、空気温度が約摂氏四十五度。ところが、それから十分ばかり経って引きよせてみると、その大蚪虫の体温が空気温度とおなじだ。君、人間が四十五度の体温にどれくらい堪えられるだろうか」

「想像もつかんよ、地球の熱極というのがあれば、『太平洋漏水孔』のことだろう」

「ふむ、ところでだ。ここに、独木舟カヌーに乗って入りこんだ、人間がいると仮定しよう。渦は、毎時周縁のあたりが三十カイリの速さ。そして、ぐるぐる巡りながら最初の島までゆくのに、どう見積つても半日は費る。するとそれまでに、その人間の命が保つかどうかということが、まず第一の問題になつてくる。僕は、医者じゃないが、受け合い兼ねますといたいね」

「分つたよ」

私はメモを置いて、落胆したように彼をみた。

「なるほど、人間の生理状態が一変しないかぎり、『太平洋漏水孔』へはゆけないと云うことが、分つた。だが、そんな工合で人間がゆけなくてだね、そこに奇談もなにもないものは、聴いても

仕様がないうよ」

すると、折竹がいきなり童顔をひき締めて、オイと、一喝する  
ように呶鳴った。

「おいおい、話というものはしまいまで聴くもんだ。僕が、何百、  
何十万年秘められていたかもしれぬ『太平洋漏水孔』の大驚異――  
それを話そうと思う矢先、早まりやがって……」

「そ、そうか」

「それみろ。とにかく『太平洋漏水孔』<sup>ダブツクウ</sup>のなかに何かしらあるらしいことは、君に作家的神経がありや、感付かにやならんところだ。といって、僕が往ったわけじゃない。じつは、ひとりそこへ入り込んで奇蹟的に生還したものがいる。そしてその人物と、僕

のあいだには奇縁的な関係がある」

「なんと云うんだ！　そして、どこの国のものだ」

「日本人だ。しかも、頑是ない五歳ばかりの男の子だ」

私は、ちよつと、暫くのあいだ物もいえなかつた。読者諸君も、その五歳という文字を誤植ではないかと疑うだろう。しかし、五歳はあくまでも五歳。そこに、この「太平洋漏水孔」ダブツクウ漂流記のもつとも奇異な点があるのだ。では、しばらく私は忠実な筆記者として、折竹の話を皆さんに伝えよう。

メラネシア  
「黒人諸島」 浦島



それが、第一次大戦勃発直後の大正三年の秋——。日本海軍が赤道以北の独領諸島を掃蕩しつくしたけれど、まだドイツ東洋艦隊が南太平洋にいらるといふ頃。はやくも、新占領区域を中心に商戦の火蓋をきった、向うみずな一商会があつた。それが、折竹の義兄が経営する海南社。のちの恒信社、南洋貿易などの先駆となつたものだ。

独艦が出没する南太平洋を縫い、ともかく小帆船ながら新領諸島と、濠洲間の聯絡を絶やさなかつたのは偉い。その、水風丸の二回目の航海、ブリック型、補助機関附きの五百噸ばかりの帆船。それが、雑貨燐鉱などをはち切ればかりに積んで、いま北東貿易

風にのり赤道を越えようとしている。

若人のあこがれ、海のロマンチズムは帆船生活にある。順風に、十度ほど傾いではしる総帆の疾走。波音と、ブロックの軋めきのほかは何もない南海の夜。仰げば、右に左に弧をえがく上トゲル檣帆ンセルのあいだに、うつくしい南の眼、赤十字星サザン・クロスのまたたき。

折竹も、珊瑚礁生物の採集というよりも、むしろこうした雰囲気に魅せられて乗っていたのだ。やがて、北東貿易風がいつとはなしに絶え、船は、聴くだに厭な赤道無風帯ドルドラムスに入ってしまった。

「驚いたですよ、船長」

と折竹もさすがに音をあげた。

「この、補助機関の震動がするあいだは地獄というわけですね。」

まったく、この蒸し暑さときたら死んじまいたいくらいだ。眼がぼつと霞んで来るし、なにも考えられなくなる。だが、あれ!!、アツ、ありや何だ」

ブーム  
下桁のしたの天幕テントのかげから、折竹が弾かれたように立ちあがった。そとは、文字どおりの熱霧の海だ。波もうねりもなく濃藍の色も褪せ、ただ天地一塊となつて押しつぶすような閃めき。と彼に、左舷四、五十鍾ケイブルの辺に異様なものが見えるのだ。環礁アトールのようだが色もちがひ、広茫水平線をふさぐに拘わらず、一本の椰子もない。

「あれかね、あれは有名な『太平洋漏水孔ダブツクウ』の渦だよ。環礁アトールのように見えるのは、盛りあがった縁だ。とにかく、はいつたら最

後二度と出られないという、赤道太平洋のおそろしい魔所なんだ」

その時、船首の辺でけたたましい叫びが起った。一人の水夫が、  
檣梯リギンの途中でわれ鐘のような声で呶鳴っている。

「おうい、変なものが見えるぞう。右舷八点だ……鳥が、籠みて  
えなものを引いてゆくが……見えたかよう」

まもなく、その二羽の鯉鳥が射止められた。引きあげられたのは  
葡萄蔓の籠で、なかを覗いた男がアツと行って飛び退いた。裸  
体の、愛らしい五つばかりの男の子が、呼吸いきもかすかに昏々とね  
むっている。なんだ、夢ではないのか。この、ちかくに島とてな  
い赤道下の海を、鳥に引かれながら漂う頑是ない男の子。

と、しばらく全員は酔ったような眼で、暑さも忘れ、じつとそ

の子をながめている。と間もなく、その子の背に手紙が結びつけられてあるのが、見つかった。船長が手にとったが、すぐ折竹にわたし、

「君、ドイツ語のようだね」

「そうです、読みましようか。最初に、この子の仮りの父となつて暮すこと一月。いま『太平洋漏水孔』中にある独逸人キューネより——とあります」

太平洋漏水孔——<sup>ダブックウ</sup> たつた一字だが、<sup>ダブックウ</sup> なんと殴られた感じだ。しかも、みればこの子は日本人のようだし、どうして、あの魔海に入りどうして抜けでたのか。しばらく全員は阿呆のように、じりじりと照る烈日のしたで動かない。

やがて、その子は手当をされ船室で寝かされた。折竹は、いつまでも醒めない悪夢のあのような気持、フラフラわれともなく檣舷<sup>リギン</sup>へのぼって、いま左舷に過ぎようとする「太平洋漏水孔<sup>ダブツクウ</sup>」をながめていた。

斜めの海、海の傾斜。とうてい、夢にも思えなかつたものが、現実として、眼のまえにある。そこには、幾重にも海水が盛りあがり、まっ蒼に筋だっている。その大漏斗をまく渦紋のあいだには、暗礁がたてるまっ白な飛沫。しかし、それはただ眼先だけのことで、はや四、五鏈先<sup>ケイナル</sup>はぼうつと曇っている。そして、煙霧のかなたからごうごうと轟いてくるのが、「太平洋漏水孔<sup>ダブツクウ</sup>」の渦芯の哮りか……。

折竹は、それをキューネの絶叫のように聞きながら、魔海からの通信を読みはじめたのである。

\*

手紙の主フリードリツヒ・キューネは、ドイツチエ・ノイ・ギネア・ゲセルシャフト独逸ニユーギニア拓殖会社ルシャフトの年若い幹部であつた。以前はお洒落で名高い竜騎兵中尉。それが先年、ベルリン人類学協会のニユーギニア探險に加わつて、以来南海趣味にすっかり溺れこみ、退役してニユーギニア会社へきたのだ。スポーツマン、均斉のとれた羚羊のような肢体。これで、モノクル一眼鏡をしコルセットをつければ、どうみても典型的貴ユ

族<sup>ノケル</sup>出土官だ。

そのキューネが、この五月に破天荒な旅を思いたち、独領ニューギニアのフィンシヤハから四千キロもはなれた、かの「宝島」の著者スチーヴンスンの終焉地、Valima 《ヴァイリマ》 島まで独木舟<sup>カヌー</sup>旅行を企てたのである。両舷に、長桁のついた、Prau 《プラウ》 につて……かれは絶海をゆく扁舟の旅にでた。そして、海洋冒険の醍醐味をさんざん味わったのち、ついに九月二日の夜フィンシヤハに戻ってきた。——話はそこで始まるのである。

土人の“Maraiho 《マライボ》” という水上家屋のあいだを抜け、<sup>マンガローフ</sup>紅樹林の泥浜にぐいと舳を突っこむ——これが、往復八千



キロの旅路のおわりであつた。ところが、海岸にある衛兵所までくると、まったく、なんとも思いがけない大変化に気がついたのだ。そこには、ドイツ兵士は一人もいず、てんで見たこともない土民兵が睡なりっている。ちよつと、ポリネシア諸島のファイター・ファイター馴化土人兵のような服装だ。

「なんだろう。国の兵隊がいず、変なやつがいるが……」

と、見るともなくふと壁へ眼をやると、そこに、土民への布告が張つてある。かれは、みるみる間にまつ蒼になつた。留守中、大戦が勃発しこの独領ニューギニアは、いま濠洲艦隊司令官の支配下にあるのが、わかつた。ことに、その布告の終りの数行をみたとき、彼はわれを忘れてかつと逆上したのである。

——濠洲軍は、なんじ等に善政を約束する。思えば、永年苛酷なるドイツ植民政策に虐げられた汝らは、ドイツ軍守備隊長フォン・エツセンに対しても、われ等と協力し復讐をわすれなかつた。彼らが、家族、敗兵らとともに密林中に逃げこんだとき、汝らはわが言にしたがい間諜をだし、たくみに彼らを導いて殲滅させたではないか。

但し、隊長夫妻ならびにその一子、以下白人戦死体の首の拾得は禁ずる。

フィンシヤハ守備陸戦隊長ベレスフォード

キューネは、眼がくらくらしめて倒れそうになった。ことに、彼と仲よしだった隊長の、子ウイリーの死を思うとかつと燃えあがる憤怒。鬼畜、頑でない五歳の子まで殺さんでもいいだろう。おそらくそれは、平素恨みを抱く土人の仕業だろうが、なにより曠かけたのはベレスフォードではないか。

と、わずか四月の間にかわつた世の中となり、いまは身を寄せるところもない今浦島となったキューネは……それから先々もかんながえず怖ろしさも感ぜずに、ただフラフラと放心したように歩みはじめた。

（殺すぞ。鬼のようなベレスフォードのやつ、からならず殺やつてしまうぞ）

いま、キューネの胸のなかには、それだけの事しかかない。すると、月のない夜がもつけの倅さまよいとなり、ふらふら彷徨ううちに隊長官舎のそばへ出た。巨きな、腕ほどもある胡瓜の蔭に、ちらつと灯がみえる。窓はあけ放され、部屋のなかが見える。壁には、子供がかぶるピエロの帽子。卓には、オモチャの喇叭ラッパや模型の海ヴァアイキング・シップ。  
 賊 船。

(ようし) 彼はぐびつと唾をのんだ。

眼には眼、齒には齒だ。ベレスフォードに、男の子がいるとは……天運とはこのこと。と、ただ復讐一凶に後先もかんがえず、やがて、ちいさな寝台から抱えあげたその子を、毛布にくるんでそつと持ちだしたのである。まもなく、夜風をはらんだ独木舟プラーウの

三角帆が深夜のフィンシヤハを放れ矢のようにすべり出た。

ブッシュ・レンジャー  
密林逃亡者

しかし、キューネは、くらい海上にでるとさすがに亢奮も醒めた。いま、父母の懐ろから拉しこられたにも拘わらず、ベレスフォードの子はかるい寝息をたてている。この、無心神のような子になんの罪がある!! いかにも、復讐とはいえどうして殺せようと、一度理性がもどれば飛んだことをしたと急にキューネはその子が不憫になってきた。

どれどれ、すぐ坊やお家にお家に帰してやるよ——と、もともとキユーネは子供好きだけに、毛布をあげてそつと顔を見ようとした。夜が明けかかり、星影がしだいに消えてゆく。当て途なく流れてゆくこの独木舟プラウのうえにも、ほの白い曙のひかりが漂ってきた。すると、いきなりキユーネがハツと身を退くような表情になり、「ちがう、こりや、ベレスフォードの子じゃない」とさげんだ。

白人ではない。五歳ばかりの、黒い髪に琥珀色の肌。くりくり肥った愛らしい二重頤。この、意外な東洋人の子におどろいたキユーネは、がたがた独木舟プラウをゆすつてその子を起してしまった。

「オヤツ」

というようなまん丸い眼をして、しばらくちがった周囲に呆氣にとられていたその子は、やがて、しくつしくつと泣きじやくりを始め、

「オジチャン、ここ、ジャツキーちゃんのお家じゃないんだね」

「そうだよ。だが、もうじきに帰してやるからね。ときに、坊やはどこの子だね」

「お父ちゃんは、日本人でジョリジョリ屋だい」

「ジョリジョリ!? ああ理髮屋とこやさんだね。で、坊やはどこで生れたんだ」

「シドニーだよ。お母ちゃんは、去年そこで死んじまったんだ。」

お父ちゃんは、それから兵隊付きのジョリジョリ屋になって、今

度も、隊と一緒にここへ来たんだがね。それも、先週の土曜にマ  
ラリアで死んじまったよ。ボクは、宇佐美ハチロウっていうんだ  
よ」

五歳で、この蛮地へきて孤独の身となるだけに、なかなか、ま  
せてもいるし利発でもある。それから聴くと、父の死後はベレス  
フォードの家へきて、そこの、ジャツキーちゃんとの遊び相手にな  
っているというのだ。してみると、ゆうべジャツキーが壁際に寝  
ていたのを、キューネが見損なつたわけなのである。しかし、と  
もかくこの子は帰さなければならぬ。

「オジチャン、オチツコが出たいよ」

きゆうに、ハチロウが尻をもじもじしはじめた。



「だけど、ジャツキーちゃんは海へオシッコすると、オチンチンを撞木鮫にとられるというよ」

と、その時どうしたとか、ハチロウの腰をおさえてオシッコをさせている、キューネの手がいきなり震えはじめてきた。遠空に、色付きはじめた中央山脈を縫いながら、するするのぼってゆくユニオン・ジャツク英国旗。しまった、もうこの子を帰そうにも帰せなくなつたと——起床ラツパの音を夢のように聴きながら、かれはまったく途方に暮れてしまったのである。

天地間、いま一人のこの身の置きどころもなくなった彼は、ハチロウの処置という重荷が加わつたのだ。多分、明ければハチロウの失踪に気がつくだろう。そして、この島の内外がきびしく調

べられるだろう。所詮自分は、ハチロウを帰そうとしてこの辺に迂路ついてはいられない。では、これからどこへ行こうか。

周囲はことごとく英仏領諸島。蘭領も米領も、所詮ドイツ人にとっては安全の地ではない。いまこの地上に一寸の土地もなくなつた。キューネはただ悶えるのみであつた。そこへ、突然ハチロウがこんなことを云いだしたのだ。

「オジチャンの、このお舟はどこへゆくんだね。坊やのお国の、日本へゆくのか？」

「行ってもいいよ」

と、彼は眼先がきゆうに開けたような気がし、

「だけど、坊やはジャッキーちゃんのお家へゆくんじゃないのか

ね」

「うん、だけどね。ジャツキーちゃんはとつても威張るんだもの。あたいを、いつも慾ばりの悪殿様にして、ジャツキーちゃんの海賊が退治にくるんだもの。だけど、あたいのお国の日本なら虐められないだろうね」

こんな、頑是ない子が郷愁をおぼえる哀れさ。それは、やはりキューネも同じことである。オジチャンも、どれほどドイツへ帰りたいか知れないよと、口には云わないがいきなりハチロウを抱きしめ頬ずりをしながら滂沱と涙をながした。

「ゆこう坊や。坊やのお国の日本へゆこうよ」

そうして二人は、安住の地へと漂泊をはじめたのであったが：

：それには、まず行きようもないと云う秘境が必要だ。ところが、独領ニューギニアの最北端に、“Nord-Malekula 《ノルド・マレクラ》”という、荒れさびた岬がある。そこには、岩礁乱立で近づく舟もなく、陸からの道には“Niningo 《ニンゴオ》”の大湿地があり、じつに山中に棲む矮小黒人種ネグリトさえ行つたことがないと云う。かれは、まず皇カイゼリン后レイン・フォレストオウガスタ川を遡つていった。

両側は、いわゆる多雨レイン・フォレストの森、パプアの大湿林。まい日七、

八回の驟雨があり、ごうごうと雷が鳴る。その雨に、たちまちジヤングルが濁海と化し——独木舟プラウが、大羊齒シダのなかを進んでゆくようになる。わけても、この皇カイゼリン后カイゼリンオウガスタ川はおそろしい川で、鰐や、泥にもぐっている“Ragh 《ラー》”という小鱈が

いる。

ほとんど哺乳類のいないこのニューギニアは、ただ毒虫と爬虫だけの世界だ。やがて、ブラウー独木舟を芋蔓でつないで、いよいよハチロウを負い『Niningo』《ニニンゴオ》の湿地へとむかった。

そのあいだの密林行。繁茂に覆われた陽の目をみない土は、ずぶずぶと沢地のようにもぐる。羊歯は樹木となり巨蘭は棘をだし、蔦や、毒々しい肥葉や小蛇ほどの巻鬚が、からみ合い密生を作っているのだ。その間に、人の頭ほどもある大昼顔が咲き鸚鵡や、モルフオ巨人の蝶の目ざめるような鮮色。そしてどこかに、極楽鳥のほのぼのとした声がする。やがて、むか百足を追い毒蛇を避けながら、

『Niningo』《ニニンゴオ》の大神地へ出たのだった。

そこは、幅約半マイルほどの、おそろしい死の沼だ。水面は、みるも厭らしいくらい黄色をした、鉋物質の滓おりが瘡蓋のように覆い、じつは睡蓮はおろか一草だにもなく、おそらくこの泥ではオールも利くまいと思われる。そしてここが、奥パプアの最終点になっているのだ。

「坊やは、ウンチがでないかね」

「また、オジチャン、泥すっぱん亀をとるんだらう。だけど、坊やだつてそうは出ないよ」

人糞を、このんで食う泥テラピン亀をとつては、この数日間二人は腹をみたしていた。しかし彼には、この沼をわたる方法がない。こんなことなら、むしろ中央山脈中に、原始的な生活をしている、矮ピ

小黒人種<sup>グミール</sup>の『Matanavat』《マタナヴァット》の部落へゆけばよかつた。と、此処へきてはや一時間とならぬのに、キューネの面は絶望に覆われてしまった。

すると、時々とおい対岸で、パタリパタリと音がする。その、なんだか聴きようによつては人間の舌打ちのように聴える音が、万物死に絶えた沼面をわたつてくるのだ。と同時にそれに交つて、小鳥のさけぶキーツという声がある。やがて、キューネがポンと手をうって、

「分つた。ニューギニアの奥地には食肉植物の、『うつぼかずら』のひじょうに巨きなものがあるという話だったが……。そうだ、一番それを使って、この沼をわたつてやろう」

やがて、ほそい藤蔓のさききに小鳥をつけて飛ばしているうちに、キーツという叫び声とともに、ぐつと手応えがした。たしかに、「うつぼかずら」の大瓶花が小鳥をくわええたにちがいない。とそれをキューネが力まかせに引くと、一茎の攀縁一アール（百平方米）にもおよぶと云う、「大うつぼかずら」<sup>ネペンテス・ギガス</sup>がズルズルと引きだされてくる。まもなく、そうして出来た自然草の橋のうえを、二人が危なげに渡っていたのである。いよいよ、目指す、*“Nor d-Malekula 《ノルド・マレクラ》”*

「坊や、ここが当分、私たちのお宿になるんだよ」

「日本かね、オジチャン」

「いや、日本へゆく道になるのさ。坊やが、ここで幾つも幾つも



おネンネしていると、そのうちにお迎いの船がくるよ」

そして、キューネの気もハチロウの気も落着いた。みれば、果物も豊富、魚介も充分。ここから、時機がくるまで伸々と過せると、キューネもほっとしたのであった。

しかし、そうして何事もなかったのもたった一日だけ……。翌朝、果実を見つげに茂みのなかへ入ってゆくと、ふいに、眼のまえに薄赤いものが現われた。

「あつ、何だ。サア、坊や、はやくオンブしな」

前方でも、ザクザクと草を踏む音がする。やがて、ベゴニアの藪のなかへ蹲んだその生物を、キューネがぐいと引きだしたのである。とたんに、彼はアツと叫び、思わず離すまいと双手に力を

こめた。それが、人間も人間、うら若い娘だった。

「Papalangi 《パパランギ》、ああ、Papalangi 《パパランギ》」

とその娘が絶え入るような喘ぎをする。

Papalangi 《パパランギ》とは、サモア語の白人という意味。

みれは、熟れかかった桃のような肌の紅味、五体はタヒチ島土人ときそう彫刻的な均斉。思わず、キューネがほうつと唸ったように、まさに地上の肉珊瑚、サモア島の少女だ。トウボ

「君、そう怯えなくたって、何もしやしないよ。だが、どうして君一人が、この Malekula 《マレクラ》にいるんだね。サモアだろう!? サモアの娘がどうして此処にいるの」

娘が、キューネに安心するまでには長時間かかった。もし愛ら

しいハチロウがこの白人のそばにいなければ、おそらくこの娘は必死に逃走をはかったろう。間もなく、かの女が此処へくるについでのかなしい物語をしはじめた。娘は、名を「Nae-a」《ナエーア》という。

「私は、なごらくサモアの国王をやっている『Tamase』《タマセ》の孫です。ところが、どういう訳でしょうか、ドイツ領事が、タマセの王系を絶やそうとするのです。祖父のタマセは、今から三十年ほどまえ伯林へ送られました。また、それから転々として亜弗利加ギニアの、おそろしい土地にも送られたことがあります。ですけど、どうしてタマセの王系がそんなに邪魔なんでしょう。父はいま、サモア酒カヴァの中毒で廃人も同様。兄も、父に見ならつて

盛んにサモア<sup>カヴァ</sup>酒をのんでいます。それも、みんなドイツ領事の薦めることなんですわ。私も、幼な心に見過せなくなりました。ただ去年といえは十一でしたけど、父と兄を諫めたことがあります。するとそれが、なにかドイツ領事に危険なものに見えたのでしようか。私を、こっそり捕まえて貿易船に抛りこみ、ここの岩礁のうえで、ポンと放したのです」

この、天人ともに許さぬ白人の暴戾は、キューネをさえ責めるように衝いてくる。まったく、ナエーアが啜り泣きながらいうように、サモアへ帰れば殺されるだろうし、といって、此処に一生いるくらいなら死んだほうが増しだという。まして、この“Nord-Malekula 《ノルド・マレクラ》”は、けっして安全な地ではな

いのだ。

「私、まだここには一年しかいませんけど、時々、おそろしい高潮が襲ってくるのです。その時は、木へのぼって、ぶるぶる顫えていなければなりません。そしてその潮は、ここの果実このみという果実のみをすっかり持ってってしまうのです。ねえ坊や、これから坊やとオジチャンとオネエチャンと三人で、どこか安楽な島へでもゆこうじゃないの」

そうして間もなく、この『Nord-Malekula』《ノルド・マレクラスツボン》を三人が出ていった。果実や泥亀の乾肉をしこたまこしらえて、また、独木舟プラーウーにのり大洋中にでたのだ。しかし、今度は目的地もない。ただ、絶海をめぐる、孤島をたずねよう。そしてそ

こが食物の豊富な常春島エリシウムであれば……。

ダブツクウ  
太平洋漏水孔の招き

「オジチヤン、これで坊やたちは、日本へいくんだね」

ハチロウは、外洋へでると大悦びだったが、そんなことを聴くと、キューネは鼻の奥がじいんと渗みるような思い、自分はドイツ、ナエーアはサモアへ……。いずれも帰心矢のごとくと云いながら、帰れない身だ。よくよく、おなじ運命のものがめぐり合わせたまんだと、ますますこんなことから結ばれてゆく三人。

ブラウー  
独木舟、いま南東貿易風圏内にある。このアウト・リッガード・カヌー雨桁付き独木舟

にはひじょうな耐波性があつて、むかしは、ハワイ、タヒチ島間  
六千キロを、定時にこの扁舟が突破していたといわれる。

「なんだから、ピコ・オウ・ワケヤ赤道に近いようすわね」

とビスマルク諸島の北端を出てから三日目の午、ナエーアが、  
しばらく手をかざしながら水平線を見ていたが、そういった。

「どうして、分るね」

「ホラ、蒼黒い筋が水平線にあるでしょう。あれが、風がちかい  
証拠だというんです。じきに、ホコ・パア北の星が見えるかもしれませ  
わ」

それまでキューネは、ただカンバス羅針盤だけでこの舟を進めていた。

いま針路は真東にゆき、エリス諸島辺へむかっている。それなのに、赤道ちかいは何事であろう。事によつたら、カイゼリン皇カンバス后カラバッシュアフガスタ川の叢林中につないで置いたあいだ、なにか羅針盤が狂うような原因があつたのではないか。そこで、念のためカラバッシュ軽便天測具を持ちだして、その夜、星を測つてみたのだ。なるほど、セントウルスの二つの輝星の位置がちがう。

かれは、軽便天測具を置くとナエーアの手をにぎつた。はじめて土人娘の坎の正しさを知つたのだ。

「私たちが、もしこの舟のうえに一生いるようになったら……」

ナエーアがある夜キューネにこんなことを云いだした。星影をちりばめたまっ暗な水、頭上のラティーン・モイル三角帆は、はち切れんばか



りに風をはらんでゐる。

「そうだねえ。僕らは、こんなようじや当分海上にいるだろうか  
らね」

事実この三人は、見る島、ゆく島の人たちによつて残酷に追われていた。キューネのだれにも分るドイツ訛りと、戦争が終つたか終つたかと聴くような怪しい男には、どの島民も胡乱うろんの眼をむけずにはいない。銃を擬せられて、逃げだすときの情なさ。まつたく、この三人はかなしい漂泊を続けていたのだ。

しかし、この扁舟のなかの二人の男女には、たがいに木石でない以上、何事かなければならない。ナエーアは、十二とはいえ早熟な南国ではもう大人であり結婚期である。二人はだんだん、自

然の慾求に打ち克てなくなってきたのである。

「私、どこでも島さえ見つければ、一生懸命に働きますわ。あなたラヴァ・ラヴァの、ズボンも棕櫚毛でつくれますわ。それに、珊瑚礁の鳥賊刺しは、サモア女の自慢ですもの」

「僕は、君の不幸にならなけりやと思うがね」

キユーネは、ふかく海気を吸ってナエーアを見まいとする。しかしその眼は、もう間もなくくるだろう、甘酔に血ばしっている。そこへ、かるい欠伸をして、ハチロウが眼をさました。

「オジチャン、もう日本へ来たのかい」

「まだまだ、坊やがそう、百もおネンネしてからだね」

「じゃ、オジチャンとオネエチャンがお父ちゃんとお母ちゃんに

なつて……、坊やは、唯今つて日本へいくんだね」

そんなことが、ますます二人を近附けてゆくのだ。すると翌朝、サゴ椰子がこんもりと茂った島に着いた。そこは、誰もいない無人島であるが、植物は、野生のヴァアをはじめすこぶる豊富だ。

三人は、ホツと重荷を下したような気になった。

「マア、なんて、いいところだろう」

ナエーアが、踊るような足取りで、水際を飛んであるいている。珊瑚虫が、紺碧の海水のなかで百花の触手をひらいている。そのあいだを、三尺もあるようなナマコがのたくり、ハーフ・ムーン半月魚という、ながい鎌鰭のあるうつくしい魚がひらひらと……。そして、森はまた花の拱廊をつらねている。

「僕はこの島を、新日本島ノイ・ヤパンということにした。ハチロウのために、そう呼んでやろうよ」

それから二人は、なかにハチロウを挟んで森のなかへ入っていた。すると、野生のヴァニラの茂みのなかに埋もれて、いまはボロボロになっている十字架が一つある。ああ、白人の墓だ——と、キューネは、びつくりして駈けよった。風雨にさらされてまっ黒になったその十字架には、からくも次のような墓碑銘が読めるのだ。

——R・Kという女。一八八二年にこの島にて死す。夫に死なれ生計の道も尽き、土人の妻となりしがため、名を記さず。

墓碑には、簡単にそうあったのだ。しかし、みるみるキューネの面が暗くなつてゆく。白人の女が暮しようもなくなつて土人の妻となつた……それを恥じて、死後も名を記さない。それなのに、いま俺とナエーアはどうなつてゆこうとしている!!

と急に、嫌悪の情がむらむらつと起つてきた。キューネにも、やはりどこかにある白人の優越感が……このたつた一度でナエーアの顔を、見るも厭なようになつてしまったのだ。彼は、幾度も詰まりながら、ナエーアに嘘をついた。

「ナエーア、やはりここも不可ない島なんだ。疫病がある。それで、ここの島には誰も住むものがないと云うんだ」

「あああアせつかく見付けたのに、不可ないんでしようか」

ナエーアはキューネの気持を知らず、がっかりして云った。そしてまた、独木舟の漂流がはじまったのだ。

キューネはそれ以来、見ちがえるような人間になった。ハチロウには、以前とかわらぬ親しさを見せるが、ナエーアにはほとんど物をいわない。そして、水また水の絶海の旅が続いた。

朝は、うすら青くすがすがしい海水が、昼には、ニスを流したような毒々しい藍色になる。そして夕には、水平線を焼く火焰の大噴射。そういう、まい日まい日繰り返えされる同じような風物に、だんだんキューネに募ってくるのはおそろしい虚無。すると、ちようどその夜あたりから、それまで吹いていた南東貿易風が弱まってきた。

「どうしたんですの。この頃は星も見ないんですね」

とハラハラしたような声でナエーアがいう。

「見ても、見なくても同じことだからね。どうせ、どこへ流れつこうが、末は分っているよ」

それから、数日間はくもつて、暗黒の夜が続いた。風は絶え、

ラティーン・セイル

二角 帆もだらりと垂れている。海も空気もネットリとなつ

て、湯気のようなガス、ねむったような蜃り。キューネは、もうどうなるうが儘とばかりに、この四、五日は方角もみない。

とある夜、風もないのに急に波だつてきた。

「どうしたんでしょう。風もないのに、こんなに荒れてきました

わ」

ナエーアは、帆を下してハチロウの上にかけた。

波は、低く窪みひろがり泡だつて、押しよせてくる。しかし、空には突風もない。ただ水面には触れずとなく上空をゆくのか、ごうつという颯風のような音がする。ところが、空が白々となつてきた暁がた近いころに、キューネがけたたましい叫び声をあげた。

「ああ、なんとというところへ来たんだ。ナエーア、こりや大変な渦だよ。ああ、<sup>ダブツクウ</sup>太平洋漏水孔！」

「だから、だから、云わないこつちやないんですわ」

ナエーアはただハチロウを抱きながら、オロオロ声でいうだけであつた。



こうして三人は、ついに「太平洋漏水孔」へ引きこまれた。海が皺だつておそろしい旋回をしながら、ぐるぐるながい螺旋をえがいたのち、大漏斗の底へ落ちこむ。水は、紫檀を溶かしたような色で二十度ほど傾むき、いま水平線はとなく頭上にかかっている。その、はじめてみた濃藍の水壁は、ごうごうと唸る渦心の哮りよりも怖ろしい。

もうこれまでと、キューネはじつと観念した。いま、朝焼けをうけ血紅のように染まっているこの魔海の光景は、ただ熱気を思つてさえ焰の海のようなだ。頭は茫つとなり動悸ははやく、おそろくこの舟が渦心に落ちこむまでに、三人は熱気のため死んでしまふだろう。しかしキューネは、疾い呼吸を感じながらも、じつと

渦をにらんでいる。

人間には、どうなつても最後まで生きようという意識がある。それがこの時に、キューネを刺戟してきたのだ。

「どうだろう、この海はこんなことではないのか。それは、渦はもとより求心性のものだが……きつとそれにつれ、うえの空気のうちごきは遠心性を帯びるだろう。つまり、くるくる中心に巻きこむ渦の方向とは反対に、うえの湿熱空気は外側へと巻いてゆく。だから、多分この湿熱帯は輪のような形でぐるりに近いところだけを巻いているのではないか。きつと、そこを突きぬけて中心に近づけば、案外この船は緩和圏へ出るのではないか。そうだ、この『<sup>ダブツク</sup>太平洋漏水孔』には島があるということだが……」

独木舟<sup>プラーウ</sup>は、その間しだいに速力を早めてゆく。傾き、飛沫をあげ、速さも約五十カイリくらいと思われる。

と、ここでキューネが狂ったのではなからうか。いきなり帆綱をもつてナエーアに躍りかかった。そして、ナエーアとハチロウを胴の間に縛りつけると、二人の鼻へ粉末のようなものを詰めゆく。それから、自分を今度は帆柱に縛りつけ、やはりさっきの粉を鼻へ詰めこむのである。やがて、死の瀬を流れてゆく渦中の独木舟<sup>プラーウ</sup>のなかで、三人は微動<sup>はじろ</sup>ぎもしなくなった。

## 水面下の島

それでは、キューネは熱気のため気狂いになったのか?! 早くも、湿熱環の禍いが頭へきたのか? いや、それは一人キューネだけではない。ナエーアも、ハチロウも異様なことを喚きだしたのだ。

「渦が、逆廻りし出しましたわ。ああ、私たちはここを出られるんですのね」

とナエーアの声にハチロウが続き、

「オジチャン、涼しくなってきたよ。もう、じきに日本へいけるね」

しかし、渦は依然としておなじ方向へ巻いている。空気は、湿

潤高熱、湯気のようにである。けれど二人は、この熱気のために気が可怪おかしくなったのではないのだ。

キユーネが、この湿熱環に堪えるため、窮通の策をほどこした。それが、もしも成功すれば起死回生を得る。

「うまく往つてくれ。ただハチロウのため、俺はそう祈る」  
キユーネが、しだいに朦朧となる頭のなかで叫んでいた。

「おれは、この湿熱環をいかに凌ぐか、考えたのだ。しかしそれには、毒をもって毒を制すよりほかにない。この摂氏四十五度もある大高温のなかにいれば、まずなにより先に気が可怪しくなってくる。

しかしその前に、こっちから進んで人工の狂気をつくつたら、

どうだ。一時、この高温を感じないように気を可怪しくさせ……そのまま湿熱環を過ぎて緩和圏に出たとき……ハツと眼醒めるようにしたら……」

それが、いま三人が嗅いでいる『Cohoba』《コホバ》の粉だ。これは元来ハイチ島の禁制品、『Piptadenia』《ピプタデニア》 *per egrina* 《ペレグリナ》という合飲科の樹の種だ。土人は、そのくだいた粉を鼻孔に詰めて吸う。すると、忽ちどろどろに酔いしれて、乱舞、狂態百出のさまとなるのだ。いま、その『Cohoba』  
ブラウー  
《コホバ》の妖しい夢のなかで、独木舟は成否を賭け飛沫をあびながら走っている。

それから、渦中をゆくことなん時間後のことだろう。ふと、外

界が朦朧と見えてきたと思うと、頬にあたる熱気を感じがちがう。オヤツ、と、キューネがふと横をむくと、舟は、大岩礁に桁先をはさんで停っている。

島だ——と彼は歓喜の声をあげた。独木舟はついに湿熱環を突破し、緩和圏中の一島についたのである。

\*

折竹は、そこまで話してふと口を休めた。そして、隣室から手紙のようなものを持ってきて、

「これからは、キューネの手紙を見たほうがいいだろう。簡単だ

が、僕の話よりも切々と胸をうつよ」

という。

\*

その島は、周囲八マイルもあるだろうか。ながらく外海と絶縁していたため、ひじょうに珍しい生物がいる。その一つが、

≪Spharags ≪スファアルギス≫だ。鳴く亀である。亀が声を発す

るとは伝説だけであろうがいま、「太平洋漏水孔」のこの島のな

ダブツクウ

かには歴然とそれがいるのだ。そいつは、ガラバゴス島の大亀ほどの巨ききで、四、五百ポンドの巨体をゆすりながら愛らしい声



で鳴く。私は、肉も食ったが、ひじょうな美味だ。

ほかには レジウルス・ボレアリス 紅 蝠 蝠 のひじょうに巨きなのがいるだけで、

生物は、ただその蝙蝠と亀だけに過ぎない。そして、島の中央は礁湖になっている。

だが ラグーン 礁湖には、普通外海との聯絡孔が水面下にあるのが通例だが、ここでは、それが最近塞がってしまったらしい。そのため、澱んだ水が高温のため腐り、どろどろの海藻や腔腸動物の屍体が、なんとも云えぬ色で一面に覆っているのだ。

まさに、これこそ死の海の景である。そこへ、赤子の手のような前世の羊歯や、まるでサボテンみたいに見える蘇鉄の類が群生し、そのあいだを、血のような蝙蝠が飛び、鳴き亀が這うとい

つたら、まず地球前史の風物というよりも化物の世界だろう。

こうして、地上に数百万年もとり残された島のなかへ、私たちはポツリと置かれたのだ。今では、ここを出たいとか人里が恋しいとか、そんな事はなにも思わなくなっている。

温度は、ここでもやはり高い。外辺のいわゆる湿熱環ほどではないが、多分摂氏四十度ぐらいはあろう。そのため、私たちはだんだん痴愚ばかになつてゆくようだ。

実際、今のところは死なないと云うだけだ。脳力、が暑さのため減退してゆくと云うことは、なにより、お利口さんのハチロウをみれば分る。今では、日本のことも何もいわなくなつたし、第一、こう云っている私がそうではないか。あれほど、自己批判の

眼をむけて触れようともしなかつたナエーアと、いまは動物の雌雄のようになっていた。

一切が、もう忘却の彼方にあるのだ。

ところで、此処へ来て私は不思議な人間になった。おそらく私は、この地上における新生物かもしれない。というのは、いつも身体を倒して斜めに歩いているからだ。ちょうど、水平とは四十五度の角度で、私は斜めにかたむきながら歩いている。またそれが、この「太平洋漏水孔」の島での普通の歩きかたなのだ。では、一体なぜだろうか。

それは、この「太平洋漏水孔」では水平というものが、大漏斗の斜面しかないからだ。それに、いつもおなじ方向からひじょう

な強風が吹いている。そのため、全島の樹木がなかば傾いて……その薙がれた角度が大漏斗の斜面と、ちょうど直角をなしているのだ。だから、そのあいだへ直立している私は、てつきり、なかば傾きながら歩いているとしか思えない。まったく、錯覚とはいえ自然天地の法則が、ここではもの見事に覆えられている。

これも、私がまったく痴<sup>ば</sup>愚<sup>か</sup>になったためか、いや、決してそうではないだろう。

海面は、黒くたかく頭上にそびえ、風と飛沫と轟音で一分の休息もない。そのなかで、私たちはだんだんに退化して、いまに鳴き亀とおなじようになるだろう。

ところが、きょう夜にかけて大颶風がやってきた。そのあと、

朦気が吹き払われ清涼の気をおぼえると、今まで忘れていたこと、感じなかったこと、また、私が是非しなければならぬことが、まるで堰切った激流のように迸りてくる。私は寸時でも、脳力を恢復したことを悦ばねばならない。

それは、私が痴愚ばかになったという第一の証拠だが、ハチロウのことをすっかり忘れていたのだ。私とナエーアが、この水面下の島で朽ちはててしまうのはよし。しかし、ハチロウをここで鳴き亀同様の存在にするということは、まったく何としても忍びないことなのだ。

私は、今夜ハチロウを外海へ出そうというのだ。それには、渡り鳥である鰹鳥を利用する。さらに『Cohoba』《コホバ》をハ

チロウにもちいて泥々に酔わせて置く。そして、そのハチロウを入れた籠を鯉鳥にひかせる。おそらく、五羽の鯉鳥はその籠をひいて、底をかすかに水面に触れながら、まっしぐらに突っ切るだろう。

愛は、ハチロウをきつと守るにちがいない。そして神も、私の天使ハチロウに倖いするだろう。

水面下の島にて

キューネ

\*

私は、読みおわってからも亢奮がさめず、なんだか此処も、斜めに倒れながら歩いている感じがするという、「太平洋漏水孔」のその島のような気がした。折竹は、にたにた笑いながら私のからだを支え、

「オイ、しつかりしろ」

と怒鳴った。私は、頭の靄がようやく霽れたように、

「そのハチロウという子は助かったわけだね。で、今は？」

「あいつかね。あいつは、時々いま重慶へ飛んでゆくよ。そして、爆薬のはいったおそろしいウンコを置いてゆく。まったく、ニューギニアといい『太平洋漏水孔』といい、よく方々へウンコを置いてゆく奴さ」





# 青空文庫情報

底本：「世界SF全集 34 日本のSF（短篇集）古典篇」早川書房

1976（昭和51）年7月15日再版発行

初出：「新青年」博文館

1940（昭和15）年2月号

※初出時の表題は、「太平洋漏水孔 漂流記」です。

※「[Dabukku\_]」や「Dabukku」の混在は、底本通りです。

入力：網迫、土屋隆

校正…Juki

2007年8月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

# 「太平洋漏水孔」漂流記

小栗虫太郎

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>